

平成28年度
運営諮問会議報告書

(ホームページ公開用抜粋版)

平成29年6月



熊本高等専門学校
National Institute of Technology, Kumamoto College

ま え が き

平成 28 年 4 月の熊本地震は、地域に甚大な被害をもたらしました。本校でも 5 月の連休を含め 3 週間休校措置をとり、その後も建物・設備の復旧に努めた結果、後期にはほぼ日常を取り戻しました。地震のために学業を続けられなくなったという学生がいなかったことは幸いでした。専門分野の知識と技術を有し、技術者としての人間力を備えた、国際的にも通用する実践的・創造的な技術者の育成および科学技術による地域社会への貢献という本校の理念に沿って、教職員一同一丸となって多岐にわたる業務に邁進しております。

高専をめぐる外部情勢には大きな動きが出てきております。実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関である専門職業大学に関する関連法案が本年 3 月に閣議決定され、国会で審議を経て 2019 年度から制度を施行するとしていますので、高専への影響などを注視してまいります。一方、文部科学省に設置された「高等専門学校の充実に関する調査研究協力者会議」は平成 27 年度末に報告書をまとめています。その中では、中学校卒業後の早い段階からの 5 年一貫で専門教育を行うという高専の特徴を高く評価し、併せて専攻科進学や大学 3 年次への編入をも考慮した教育内容の充実の必要性が指摘されています。さらに IoT、ロボティクスなどにより、今後第 4 次産業革命とも呼ぶべき産業構造や就業構造の変革が予想されており、これら新分野への展開の必要性のほか、地方創生における高専に対する要請などが述べられています。自民党内の高専を考える議員連盟や文部科学部会のプロジェクトチームでも、高専について議論が進められています。いずれの議論においても、国立高専のこれまでの教育に関する評価は極めて高く、その重要性はゆるぎないものですが、社会の要請に応じた改革の努力が不可欠であることを改めて確認しているところです。

さて、高等専門学校は、教育研究、組織運営及び施設設備の総合的な状況に関し、7 年以内ごとに文部科学大臣が認証する評価機関の実施する評価を受けることが義務付けられています。本校は、平成 28 年秋にこの評価を受けました。それに先立つ今回の運営諮問会議では、多岐にわたる評価内容のご説明とご審議のあり方についてご意見をいただいたのち、教員の教育能力の向上のための F D 活動についてご説明申し上げご指導を頂戴することといたしました。

今回、熊本キャンパスで開催される運営諮問会議は、熊本高専として第 7 回目となります。委員の皆様にはお忙しい中ご出席賜り、長時間熱心にご審議頂きました。心よりお礼申し上げます。地域の各界のリーダーであられる委員の皆様から頂きましたご指摘、ご助言は、本校の運営に活かして参る所存です。

委員の皆様のご理解とご支援に厚く感謝申し上げます。

平成 29 年 3 月

熊本高等専門学校長 長谷川 勉

目 次

まえがき

1. 熊本高等専門学校運営諮問会議委員名簿	1
2. 熊本高等専門学校運営諮問会議規則	2
3. 日程等	4
4. 出席者名簿	5
5. 前年度の提言等に対する改善に向けた対応	7
6. 議事記録	1 3
7. 今年度の会議における提言事項	2 1
8. 説明資料	

1. 熊本高等専門学校運営諮問会議委員名簿

氏 名	現 職
足 立 國 功	熊本県工業連合会会長
荒 木 義 行	合志市長
伊 藤 英 典	熊本県商工観光労働部商工労働局長
宇佐川 毅	国立大学法人熊本大学工学部長
亀 田 英 雄	熊本高等専門学校八代キャンパス同窓会長
櫻 井 一 郎	櫻井精技株式会社代表取締役社長
中 村 貞 二	熊本県中学校校長会会長
中 村 博 生	八代市長
平 田 雄一郎	平田機工株式会社代表取締役社長
松 下 純一郎	熊本日日新聞社編集顧問 新聞博物館長
松 村 民 雄	熊本高等専門学校熊本キャンパス同窓会長

(委員氏名は五十音順、敬称略)

2. 熊本高等専門学校運営諮問会議規則

平成23年5月17日制定
平成28年3月18日一部改正

(趣旨)

第1条 この規則は、熊本高等専門学校内部組織規則第9条第3項の規定に基づき、熊本高等専門学校運営諮問会議（以下「諮問会議」という。）に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 諮問会議は、熊本高等専門学校（以下「本校」という。）の教育研究活動等の状況について評価及び助言等の提言を行い、本校での自己点検・評価に関する活動を支援することを目的とする。

(任務)

第3条 諮問会議は、次に掲げる事項について、校長の諮問に応じて評価等を実施するものとする。

- (1) 本校の教育研究上の目的を達成するための基本的な計画に関する事項
- (2) 本校の教育研究活動等の状況について本校が行う自己点検・評価に関する事項
- (3) その他本校の運営に関する事項

(組織)

第4条 諮問会議は、本校の職員以外の者で次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 大学等高等教育機関の関係者
- (2) 本校の所在する地方自治体の関係者
- (3) 本校の所在する地域の教育関係者
- (4) 本校の所在する産業・経済界の関係者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) 本校を卒業又は修了した者
- (7) その他高等専門学校に関して広くかつ高い識見を有する者

(委嘱)

第5条 委員は、校長が委嘱する。

(任期)

第6条 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長)

第7条 諮問会議に、会長を置き、校長が指名する者をもって充てる。

2 会長は、諮問会議を招集し、その議長となる。

3 会長に事故があるときは、校長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(委員以外の者の出席)

第8条 会長が必要と認める場合は、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(開催)

第9条 諮問会議の開催は、原則として年1回とし、開催場所は熊本キャンパスと八代キャンパスにおいて交互に開催する。

(事務)

第10条 諮問会議の事務は、総務課において処理する。

(雑則)

第11条 この規則に定めるもののほか、諮問会議の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成23年5月17日から施行する。
- 2 この規則施行後最初に委嘱される第4条の委員の任期は、第6条の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

3. 日 程 等

日 時 : 平成28年10月25日(火)

会 場 : 熊本高等専門学校 熊本キャンパス (ICTホール)

次 第 : 開会(校長挨拶)

日程説明、出席者の紹介等

前年度提言等に対する改善に向けた対応について

説明・協議

【テーマ1】熊本高等専門学校の自己点検・評価システムについて

説明者：伊藤利明（自己点検評価委員会副委員長）

【テーマ2】教育の質の向上と改善のためのシステムについて

説明者：永田正伸（FD推進室副室長）

まとめ・その他意見交換

閉会(校長謝辞)

4. 出席者名簿

【運営諮問会議委員】

足立國功	熊本県工業連合会会長
伊藤英典	熊本県商工観光労働部商工労働局長
宇佐川毅	国立大学法人熊本大学工学部長
亀田英雄	熊本高等専門学校八代キャンパス同窓会長
田口智弘	櫻井精技株式会社管理グループ主任技師 ※櫻井一郎委員(櫻井精技株式会社代表取締役社長)の代理出席
中曾哲也	熊本県中学校長会幹事 ※中村貞二委員(熊本県中学校長会会長)の代理出席
中村博生	八代市長
平田雄一郎	平田機構株式会社代表取締役社長
藤井勝公	合志市副市長 ※荒木義行委員(合志市長)の代理出席
松下純一郎	熊本日日新聞社編集顧問 新聞博物館長
松村民雄	熊本高等専門学校熊本キャンパス同窓会長

(委員氏名は五十音順、敬称略)

【学校関係者】

長谷川 勉	(校長)
大塚 弘文	(副校長・熊本)
開 豊	(副校長・八代)
松田 豊稔	(教務主事・熊本)
下田 貞幸	(教務主事・八代)
工藤 友裕	(学生主事・熊本)
古嶋 薫	(学生主事・八代)
小山 善文	(寮務主事・熊本)
小林 幸人	(寮務主事・八代)
清田 公保	(総務主事・熊本)
小田 明範	(総務主事・八代)
藤本 洋一	(ICT活用学習支援センター長)
石原 秀樹	(ICT活用学習支援センター副センター長)
嶋田 泰幸	(グローバルリーダーシップ育成センター長)
宇ノ木 寛文	(グローバルリーダーシップ育成センター副センター長)
小田川 裕之	(地域イノベーションセンター長)

田 中 禎 一	(地域イノベーションセンター副センター長)
草 野 美智子	(共通教育科長・熊本)
米 沢 徹 也	(共通教育科長・八代)
葉 山 清 輝	(情報通信エレクトロニクス工学科長)
柴 里 弘 毅	(制御情報システム工学科長)
孫 寧 平	(人間情報システム工学科長)
毛 利 存	(機械知能システム工学科長)
浦 野 登志雄	(建築社会デザイン工学科長)
田 浦 昌 純	(生物化学システム工学科長)
村 上 純	(電子情報システム工学専攻長)
木 場 信一郎	(生産システム工学専攻長)
齊 藤 郁 雄	(F D推進室長)
永 田 正 伸	(F D推進室副室長)
池 田 直 光	(自己点検評価委員会委員長)
伊 藤 利 明	(自己点検評価委員会副委員長)
愛 場 優 治	(事務部長)
内 山 慎 一	(総務課長)
佐々木 勝 啓	(管理課長)
高 浜 佳 依	(学務課長)
浦 口 健 一	(学生課長)

平成27年度提言に対する改善に向けた対応について

平成27年度提言に対する改善に向けた対応は、前回開催しました運営諮問会議において、各委員からいただいた貴重なご意見を整理された上で、運営諮問会議会長名によりご提出いただいた提言事項について、本校において改善に向けた対応を検討した結果です。

この改善に向けた対応は、両キャンパスの運営会議で報告し、学校全体で取り組む課題として共通認識され、今後も引き続き改善に取り組んでいくことにしています。

改善に向けた対応は、以下に示すとおり、既に改善が実施されているものから改善には今後十分な検討を要するものまで、4つの区分で分類しています。

- | | |
|------|---------------------------|
| 対応区分 | A＝改善に向けた対応を、実施しているもの |
| | B＝改善に向けた対応を、直ちに行う必要があるもの |
| | C＝改善に向けた対応を、将来的に行う必要があるもの |
| | D＝改善に向けた対応には、十分な検討が必要なもの |

前回受けた7項目の提言事項は、それぞれを以下のように整理しています。

【提言事項】

運営諮問会議会長名により受けた提言です。

【提言に関するご意見抜粋】

委員の方からのご意見を抜粋したものです。

【対応区分】

提言の現状確認を行い、対応の進展状況を、上記の4つの区分で分類したものです。

【提言に対する点検及び改善に向けた対応】

提言に対する具体的な改善方策を取りまとめたものです。

◎教育活動に対する提言（提言１～３）

提言１

【提言事項】

高度化再編し、一つの高専になるために掲げていた当初の目標の達成度や、高度化再編したことによる実績・成果を、きちんと自己点検評価してもらいたい。

【提言に関するご意見抜粋】

「亀田委員(八代キャンパス同窓会長)」

自己点検評価にあたっては、一つの学校として統一した教育体制ができているかを留意したとのことだが、それぞれのキャンパスには歴史があり、独自性を出してもいいのではないかと。

「村山委員(熊大工学部長)」

一つの高専になるにあたって掲げていた目標に、きちっと向かっているかを点検評価することが重要であり、一つの高専になったことで、何ができて、何ができていないのかを自己評価して欲しい。

「足立委員(熊本県工業連合会会長)」

いろいろな項目で自己点検評価するのであれば、熊本高専が高度化再編してどうだったのか、その点の自己点検評価というののもあっていいのではないかと。高度化再編した成果等を点検評価することで、国からの評価も高くなるのではないかと。

【対応区分】

C

【提言に対する点検及び改善に向けた対応】

本年度の企画委員会の検討項目として、「新高専の成果検証」を掲げ、検証作業を開始していますが、本校にとっても重要なテーマであり、データ収集や内容の検討も含め、かなり時間を要する見通しです。来年度末を目途にまとめる予定ですので、少し時間を頂きたいと思います。

提言２

【提言事項】

学生による教育到達目標の達成度評価や、学生が主体的・能動的に関わる授業など、熊本高専が独自に工夫していることについて、自己点検評価してもらいたい。

【提言に関するご意見抜粋】

「甲斐委員(熊本日日新聞社論説委員、村山委員(熊大工学部長))」

八代キャンパスで学生による教育到達目標の達成度評価を実施していることで、どのような成果があるのか明確にしてはどうか。

「松村委員(熊本キャンパス同窓会長)」

授業の工夫として、学生が主体的・能動的に関わるとあるが、具体的に自己点検した結果を示してもらいたい。また、学生が自己点検シートを記入して確認しているとあるが、自己点検シートをどのように活用して、どのような効果があるかについても、具体的に自己点検評価してもらいたい。

【対応区分】

A

【提言に対する点検及び改善に向けた対応】

学習・教育到達目標の達成度の評価の手段として、「学習等の活動記録及び達成度記録簿」があります。これは4年生以上が年に一度、卒業までにクリアすべき到達目標に対する自身の到達状況を自己点検するものです。いずれも学生自身が自分の現状を確認しその後の取り組みに反映させることが主目的ですが、担任等による学習指導にも活用されています。また、学生自身が学習を自己管理する仕組みの一つとして、定期試験ごとに実施している「学習自己点検シート」（八代キャンパス）や「学生・保護者連絡票」（熊本キャンパス）があります。これは学生自身が日頃の取り組み状況と試験の結果を自己点検し、日常的な学習状況の振り返りとして利用されています。

授業の工夫としては、アクティブラーニングやPBLを取り入れた授業が積極的に実施されており、反転授業、グループ学習等の実践例が見られます。PBL手法による創造性教育の成果としては、外部コンテストでの受賞などがあげられます。

提言3

【提言事項】

地域性を大事にして、学生が地元へ就職し定着するように、地域や地元の産業のことを学べる教育に取り組んでもらいたい。

【提言に関するご意見抜粋】

「伊藤委員（熊本県商工労働局長）」

地域性というのは大事にしていきたい。就職率は100%であるが、その中で、県内に就職している学生はどれくらいで、就職後の早期退職の状況はどうか、そのあたりも自己評価していきたい。

地域の歴史・文化を学ぶのは非常に重要なので、推進していただくとともに、現在の熊本の産業についても学生に学んでもらい、現在の熊本の姿をしっかりと認識することをカリキュラムの中に反映していただきたい。

【対応区分】

A

【提言に対する点検及び改善に向けた対応】

県内就職の学生数は平成28年3月卒業生で本科9%（12名/127名）、専攻科18%（9名/48名）であり、例年同程度の割合です（進学者を除く）。その他本県が県外であっても県内勤務（支社等）の学生もいますが、実数は把握できていません。また、就職後の早期退職の状況については、本校独自の調査でなく、時期を問うものでもありませんが、平成26年度の調査によれば、転職（離職）の経験が無い割合は「57.1%」、初職の勤続年数は平均「6.77年」です（「高専卒業生キャリア調査」2015・3）。熊本の産業を学ぶ機会として本科4年、及び専攻科1年を主たる対象に合同企業研究会やセミナーを実施しています。参加企業のうち地元企業は熊本で24社、八代で16社です（平成27年度）。また、「熊本地方COC+推進協議会」の一員として、卒業生の地元就職推進に取り組んでいます。

◎学生支援活動に対する提言（提言 4～5）

提言 4

【提言事項】

学生支援は、身近な担任や指導教員が適切に相談等に対応することが重要であり、対応状況を統計的にまとめ、評価・分析してもらいたい。

【提言に関するご意見抜粋】

「村山委員(熊大工学部長)」

学生支援は、身近な担任や指導教員がどのように対応したのかということが重要である。各担任が相談にきちんと対応し、その状況を統計的にまとめておくことが必要である。

【対応区分】

A

【提言に対する点検及び改善に向けた対応】

学生からの相談について、外部カウンセラーや保健室への相談内容や相談件数について、これまでも学生相談室が中心となり、年度ごとにデータを集計し、過年度のデータと比較し、適切な学生支援体制が整っているか検証してきました。今年度より、担任についても学生面談記録について共通のフォーマットを整備し、学生からの相談記録を蓄積、統計的に分析することにより、全学を上げて学生支援ならびその改善に務める体制を強化しています。

提言 5

【提言事項】

熊本高専の特長としてどのような学生支援があるか点検・評価し、独自の特色のある支援活動を検討してもらいたい。

【提言に関するご意見抜粋】

「村山委員(熊大工学部長)」

熊本高専の特長として、どういう支援があるのかということ点を点検、評価すること。経済面の支援では、学生寮の支援を含めて特長を出してはどうか。

「足立委員(熊本県工業連合会会長)」

クラブ活動についても両キャンパスを統一チーム化することで、総合力を上げて全国大会等での活躍を目指してはどうか。

【対応区分】

A

【提言に対する点検及び改善に向けた対応】

八代キャンパス同窓会では、八代キャンパスに在籍する学生が家庭の事情等により授業料の支払が困難となった場合の支援を目的として、八代キャンパス同窓会による学生支援基金を平成 20 年に設立し、支援を開始しています。具体的には、八代キャンパスの学生が、不測の事態により年度末の指定された期日までに授業の支払が困難になった場合、

基金より授業料の一部にあたる 10 万円を上限として学資負担者（保護者）に貸与する支援を行っています。これまで、平成 20、21 年度にそれぞれ 3 名、平成 22、27 年にそれぞれ 1 名について支援を行っています。また、熊本キャンパス同窓会では、高専体育大会、ロボコン、プロコン等の全国大会に出場する学生に対し一人当たり 5 千円を援助し学生を支援しています。

◎研究活動に対する提言（提言 6～7）

提言 6

【提言等項】

研究活動の点検評価にあたっては、どのような分野が伸びているかなど、今後の研究活動の方向性を見据えた分析をしてもらいたい。

【提言に関するご意見抜粋】

「村山委員(熊大工学部長)」

科研費の獲得が倍増したことは良いことだが、評価をする際は、どのような分野が伸びているか特長を捉え、どの研究が進んでいて、どの研究が不十分なのか、というところを自己点検して評価することが大事である。

【対応区分】

A

【提言に対する点検及び改善に向けた対応】

高専では、これまで技術者教育を中心におき、教育と研究の 2 本柱で早期技術者の育成を行なって来ました。しかし、近年における運営費交付金（国からの補助金）の継続的な削減が続く中で、高専の教員も外部資金を自ら獲得していく研究力の強化が求められてきています。

これまでの高専における研究活動は大学と比較すると、小規模で相対的に個人ベースでの研究活動が中心です。熊本高専でも、いくつかの研究グループが立ち上がり共同研究を進めようとする動きがみられますが、現状は個々の教員が主体的に研究を行なっています。その結果として、高専における科研費の申請は、分野毎には元々の母数が少なく、特定の分野に注力した形式でなく各教員が得意とする分野、もしくはその周辺・関連分野への申請が中心となっています。また、個々の科研費申請が採択されると 2 年から 4 年のスパンで研究費が継続して配分されるため、大学のように分野ごとの母数が多くないことから、研究成果の伸びを直接的に評価しにくい状況にあります。このため、本校では特定の分野に特に限らず（各教員の研究レベルの底上げに重点を置いた評価）、さまざまな分野での総合的な採択数の増大を目標としています。ただし、申請に際しては、事前に「科研費データベース」を分析し、採択率が伸びている分野等の情報を、学内 Web サイトにより教員に提供するなどの配慮は行なっています。

学校側の支援としては、「MoCCoS 塾」、「外部講師による講演会」、「科研費テーマ検討会」等を実施しており、これにより申請書のブラッシュアップによる採択率のアップを目指しています。また、長谷川校長着任後、①初任教員への研究費貸与（分割返済）、②科研費獲得へのインセンティブ（採択されなくても「A」評価なら校長裁量経費からの資金援助）、③学内研究員制度の創設・運用開始、④研究推進の効果がある若手教員の校務の負担減など、積極的な「研究力強化」のための対策が進められています。特に科研費、不採択の

申請課題のうち、「A」評価（ほぼ採択と同等の評価）であった者に対して、翌年度の採択を目指して早期に実質的な研究に着手するための「校長裁量経費」によるインセンティブ経費の支援や、校長・産学連携コーディネーターによる、申請書のピアレビュー（「A」評価を含む希望者を対象として）の支援により、平成 28 年度に新規に科研費が採択された教職員も増加傾向にあります。

このような実質的かつ効果的な取り組みを着実にこなうことにより、近年、採択数を増やしてきました。なお、平成 28 年度は残念ながら新規の科研費採択数が前年度の 12 件より下がり 4 件でしたが、「A」評価の数は 17 件と次年度の採択に向けた可能性のある研究テーマが着実に増えており（前年度は 8 件）、次年度の新規採択件数の増加を目標とし、ここで示した支援を現在、継続して実施しています。

提言 7

【提言事項】

県内にキャンパスが 2 か所あることをメリットとして活かして、教育研究の充実・活性化を図ってもらいたい。

【提言に関するご意見抜粋】

「伊藤委員（熊本県商工労働局長）」

キャンパスが県内に 2 か所あることをデメリットではなくメリットと捉え、2 か所の拠点あることを活かし、地域の企業との連携等を県内に広く展開するなど、教育研究の充実・活性化を図っていただきたい。

【対応区分】

A

【提言に対する点検及び改善に向けた対応】

現在、熊本高専は熊本県工業連合会と包括連携協定を締結しており、この協定に基づいた COOP 教育（Cooperative Education）の一環として、企業が持つ課題を両キャンパスの学生がアイデアを出して解決する「閃きイノベーション」を毎年開催しています。

また、地元企業からの技術相談や自治体からの専門家の派遣要請などにも積極的に対応しています。特に技術相談については、熊本高専に配属されている産学連携コーディネーター等を介して両キャンパスでその情報を共有し、県内外の企業からの支援要請に対応しています。これらの技術相談等の対応を通して企業や自治体との連携がさらに強化されています。

熊本高専の両キャンパスには、最先端の研究設備、測定設備、工作機器が導入されており、両キャンパスの地理的特徴も生かしながら、これらの設備の利用促進を図ることによって、県内の幅広い地域、産業分野の企業との連携強化を推進していきたいと考えています。

6. 平成28年度運営諮問会議要旨

日 時 平成28年10月25日（火）14時00分～16時10分

場 所 熊本高等専門学校熊本キャンパス ICTホール

出席者 【運営諮問会議委員】11名

足立國功、伊藤英典、宇佐川毅、亀田英雄、田口智弘、中曽哲也、
中村博生、平田雄一郎、藤井勝公、松下純一郎、松村民雄

【本校関係者】36名

校長、副校長2名、主事8名、3センター長・副センター長6名、
共通教育科長・学科長8名、専攻長2名、FD推進室長・副室長2名、
自己点検評価委員長・副委員長2名、事務部長、課長4名

1. 開会あいさつ

長谷川校長から、最近の高専を巡る社会の情勢をはじめ、熊本地震時の対応及び被災学生の支援の経緯、全国高専デザインコンペティション等各種大会における本校学生の活躍状況等の報告があった。

また、今回は諮問の在り方及び教員の教育能力向上のためのFD活動について、ご意見をいただきたい旨、依頼があった。

2. 日程説明、出席者の紹介等

本日の日程について、会議資料に基づき説明があった後、出席委員の紹介があった。

3. 運営諮問会議会長の指名

運営諮問会議規則第7条に基づき、熊本大学工学部長の宇佐川委員が会長に指名され、会議の議長を務めることになった。

4. 前年度の提言等に対する改善に向けた対応

議長から、会議資料に基づき、前年度の提言等に対する本校の改善に向けた対応状況について、提言1「高度化再編し、一つの高専になるために掲げていた当初の目標の達成度や、高度化再編したことによる実績・成果を、きちんと自己点検評価してもらいたい。」については、検証作業を将来的に行う必要があるということで対応区分「C」の報告、提言2から提言7の6件については、改善に向けた対応を実施している状況である対応区分「A」であるとの報告があり了承された。

5. 説明・協議

○伊藤自己点検評価委員会副委員長の説明概要

「自己点検・評価システムについて ～今後の運営諮問会議の諮問のあり方～」

運営諮問会議は、本校が第三者評価機関として位置づけるもので、本校の策定した基準による教育研究等の総合的な点検・評価をしていただくということが重要な役割

の1つと考えている。この運営諮問会議の重要な役割について説明し、その役割についてご確認をしていただくというのが目的の1つで、2つ目の目的は、今後の運営諮問会議のあり方についてご意見を承りたいということです。

・運営諮問会議の諮問のあり方について

本校が定める点検・評価は7年に1度実施される。その点検・評価14の基準のうち、2～3の基準を、毎年開催される運営諮問会議のテーマとして取り上げて検証していただければどうか。

・期待される効果

1. 委員の負担が軽減される。
2. 提言の対応は翌年に報告されるので、改善に活かされやすい。
3. 総合的な活動全般にわたって遺漏なく検証ができる。

・懸念される問題

1. 観点に沿った検証だけに終始し、自由で活発な議論になりにくい。
2. 基準の検証を優先するあまり、タイムリーな取り組みが諮問の時期を逸してしまう。

○自己点検・評価システムについての意見交換「抜粋」

【委員のご意見】基準の14の項目は質的な違いがあるため2つずつとなると議論が難しくなるのではないかと。例えば、高等専門学校等の目的等は7年に1度回ってくる頻度で十分だと思うが、教育に関しては目の前の学生のことなので、インターバルが短くてもいいように感じる。

【委員のご意見】1年に1回の2時間の会議で、諮問の在り方についての再確認はもう良いのではないかと。今さら諮問の在り方をここで問われてもなかなか難しいような気がする。学校側がやりやすいようにある程度ポイントを絞って、会議にかけていただきたい。

【委員のご意見】この諮問会議は、委員がそれぞれの立場で意見を言わせていただくという立場なので、学校側である程度テーマを決めていただき、その中で委員に対して意見が欲しいというタイムリーな事項を選定していただきたい。

【委員のご意見】流れとしては、順番に流すよりも学校側で今話題になっていることをある程度絞っていただき、また14の中で諮問に付すべきテーマでないものははずしてもいいのではないかと。

○永田FD推進室副室長の説明概要

「教育の質の向上と改善のためのシステムについて

～熊本高専のFD活動について～」

FDというのは、Faculty Developmentの略で、Faculty Developmentは中教審の

平成17年度の答申によると「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」このような説明になっている。

- ・意見をいただきたい点
 1. 組織的に適切に実施されているか。
 2. 効果を挙げているか。
 3. 今後、改善すべき点、新たに取り組むべき活動等があるか。
- ・これまでの主なFD活動
 1. FDに関する研究会・研修会の開催
 2. 学生による授業評価の実施
 3. 公開授業の実施
- ・FD推進室の新たな取組
 1. FD推進室の活動方針の明確化
 2. 両キャンパスでの統一的なFD活動の推進
 3. 教員向け研修会の計画的な実施
 4. FDに関する情報共有・情報発信のためのWebページの作成
 5. 外部研修会等への参加支援

○教育の質の向上と改善のためのシステムについての意見交換「抜粋」

【委員のご意見】FD活動については、引き続き活動されていくと成果は上がっていくと思うが、高専の学習内容は1時間の家庭学習でついていけるものなのか。学生のレベル自体が下がっていったるのであれば、先生方が求めるレベルを示して評価をさせないと、学生たちが低いレベルで評価してもこの評価というものがあてにならなくなってくるのではないか。FD活動をしながら先生方の授業力を上げるのもそうだが、学生たちの到達目標というのを高いレベルに持っていかないと活動自体が意味をなさなくなってくるんじゃないかなという気がする。その辺のところを高専内で考えていただきたい。

【永田FD推進室副室長】1日平均1時間というのは、試験期間前に集中して実施しているのを平均すると1日1時間という感じではないかと考えている。学生が勉強をしなくなっているということについては、今言われているアクティブラーニングや反転授業、PBL（Problem/Project Based Learning）とかいろいろな授業の形式があると思うが、そういう取り組みについてはまだ少ないと思うので、ID（Instructional Design）などもその一つのきっかけになればと考えている。

【齊藤FD推進室長】授業アンケートの勉強時間ですが、1時間というのは試験前の勉強は含まれていないと思う。普通の日々の勉強時間が1時間くらいか。平均1時間でいいのかというと、やはりそれでは足りないと思うので、学校としてはどうやって学生の自学・自習をすすめるかということテーマとして考える必要がある。

【清田総務主事】情報セキュリティとかIT塾、国家試験の勉強など、学生たちがもう少し勉強したいというところを、各学科の教員がやっており興味のある学生が残って勉強している。学校で放課後勉強して、課題とかは家庭で行うので、それが1時間、それにしても時間が少なすぎると思う。

【松田教務主事】平成26年度から熊本キャンパスで1年生を対象に学生の学習時間の調査を行っている。試験前3週間の学習時間の平均時間がクラスを成績で4グループに分けちょうど真ん中のところが、1日当たり2.5時間、トップの方は3.6時間、それで年間で通したら確かに1時間ぐらいになるかもしれない。予習・復習等の課題の中心になるが、少なくとも2時間は勉強しなさいと学生には指導している。また各教科の到達目標をルーブリックで定めている。

【委員のご意見】FDは分かりやすい授業を行うということで大賛成である。要は、わかりやすい授業になれば、授業中に頭の中に入るので、家に帰っても勉強しなくてもいいというのが理想だと思う。それと今の学生は、昔と違って意欲が少ないので、意欲がわきやすい授業で本人がやる気を起こせばいいと思う。FD活動で先生は覚えやすい授業、分かりやすい授業に取り組み、実際どのくらい学生の点数が上がったか具体的に示していただきたい。

【委員のご意見】先生たちは授業をやりながら、授業の内容や組織的な改善までやらなくてはいけないということで、非常に大変だと思う。技術は日進月歩で進んでいるので、そういう勉強までしなくてはいけない。せっかくこういった形で私たちが企業側として関わっているわけですから、企業側の情報を先生に提供し、それを使って先生たちが授業をされると負担は減るのではないかなと思う。そんなことができないのかなと思った。

【委員のご意見】授業外の時間なのですが、eラーニングで問題が解けるようになるまで学生に要求すると、できる子は1回で終了するし、できない子は何度も繰り返し、自分自身ができたという満足感を得るチャンスを増やすことができる。そういう工夫は可能性としては多分にあるのではないかなと思う。また、複数の教員が同じ授業科目をやっても、単位認定の水準を一致させることができるので、例えば2キャンパスで協力されて同じ科目を共通の先生方が教材として開発して、試験問題もクロスさせるような工夫をすると熊本高専自体のポテンシャルを高め、しかも労働時間は半分といたらちょっと大げさかもしれないが、反転学習、PBLなど、いろいろな方法が手法としてはあると思う。

【委員のご意見】私も企業側としてどういう人材を育ててほしいというニーズも聞いて、こういう教育でいいのかという意見を聞くことに基本的なところがあると思う。学校側と産業界側は違うので、違うのは違うままでやっていかざるを得ない。是非、立場

の違いがあるということを認識して、そこでどうコラボレートしていけるのかということ、高専が出されている案に盛り込んでいただくと、我々も話ができると思う。

【委員のご意見】企業としては最先端のものを生み出すため日夜やってるわけですから、例えばサーボの授業をしたいというときに、協力してくれよっていう話があれば、協力することによって学生に教える授業の内容のクオリティが上がると、今こういうサーボの使い方をしてるんだとか、新しいことを先生自体も勉強して、結果的に効果が上がるみたいなことができるといいなと思う。

【委員のご意見】ゲスト講義などを入れると楽になるのではないかな。そうしたら、みんなに声をかけて出前でやらないかという話はあると思う。やはり企業のニーズは何かということをつかっていたら必要があると思う。

【委員のご意見】FD活動については、組織的に運用されているということは皆さんもご理解されている。効果について少し議論はあったが、学生の成績が上がっているかどうかという視点はいないか。今後改善すべき点というのは、具体的にいろんなテーマを上げてあるのでそれを進めていただければそちらの方向に行けるのではないかなと思う。また、地域と連携して先生方の負担が減るようなことがないか検討していただければと思う。

【委員のご意見】先生ばかりではなくて、学生にも過剰に負担がかからないようにしなければならないと思う。創造的な芽を摘まない、それが閃きイノベーションです。

【委員のご意見】FDは教員側の議論ですが、結局その受益者である学生の事を考えたFDであるべきだということですね。

○フリートーク「抜粋」

【委員のご意見】先日、ノーベル生理学・医学賞を受賞された方が、式で研究費が少ないという話をされていた。学校のニーズと会社のニーズが合えば、なにか基金を設けるとか、この会議で提案できないかなと思う。

【委員のご意見】日本の高校とアメリカの高校とかを比較すると、教育にける金額に違意がある。教育にお金をかけることによって学生たちが成長し、なおかつ、日本の大学を卒業した人が即戦力で働けるぐらいの差が出てくるので、企業側が協力できて、それで先生、学生が楽になり、その学生たちも優秀になれば、地域としても万々歳だと思う。

何かしらテーマをもって協力できないかということイメージ的に持っている。

【委員のご意見】高専と同じだとすれば大学も共同研究契約、受託研究とかいろいろな研究契約に基づいてやるというのが枠組みとして唯一使えるというところだと思う。亀田委員からの研究費が少ないというのは実は、すごい状況に我々のところもおかれているということで、それはおそらく高専も同じく厳しい状況であると思う。

【委員のご意見】アメリカの大学は特許をとって利益を上げるようなところがあるが、日本の学校は金儲けについては線引きされているような気がする。

【委員のご意見】何かしら企業として協力できることを考えてくださいということ、それだけです。

【委員のご意見】特定の企業が金を出して自分たちのところに学生を囲い込みたいという意味合いはありません。ただ地域の学校に対する教育レベルを上げるような活動ができないのかということです。

【委員のご意見】ただ、COC+には、高専も入っていますね。ということは、やっぱり地場に残ってもらわなければいけないという、それは大変だと思う。

【委員のご意見】それとやはり先生方が企業とどの程度交わりがあるのかが見えない。そのような話題はあまり聞きませんが高専はどうなのでしょう。

【長谷川校長】以前、この会議でも取り上げていただき、高専を外から見えるようにということで、情報をなるべく出すようにしている。教員がどういう研究業績があり、どういうことをやっているのか、どういうテーマに関心があるのかといったものは今、ホームページに全ての教員がデータを出して見えるようにした。以前より共同研究はかなり増えてきている。そういう意味で見える化と、そこから教員の意識もだいぶ変わったと思うが、まだまだ足りない点はあると思うので、今後、ますますそれを強固にするよう努力していきたい。地域との連携により研究をする中で、学生も学ばせるということは、教科書の内容を教えることだけが教育ではないとか、未知の問題に取り組んでそこに何らかのアプローチをするような力を私たちは持たせたいという希望があるので、例えば、その共同研究の中に、学生と教員が一緒に入って進めていくことで、未知の問題に取り組む姿を教員が学生に見せることもでき、学生も一緒になってそこで学べるであろうと思っている。そういう意味では、地域や企業との共同研究は、これからますます強化させる必要があり、単に研究力ということではなくて、教育の上でのそういう動きが重要となってくると思う。

【委員のご意見】企業がなにか貢献できないかという中で、私は八代高専出身で大学も経験してきて、ちょっと足りないなと思ったのが、例えばモーターについて勉強しましたと、じゃあ具体的に世の中ではどういうモーターがどういう使われ方をしている

んだとか、産業界でいうとサーボモーターとかステッピングモーターとか。企業側からの協力という、例えば、安川電機さんの技術者の方に来ていただいて、今のサーボモーターの現状はこうなんだと、それで、うちのはこういう使われ方をしているとかな、そういう枠が例えば、1時間、2時間あってもいいのかなと。センサーにしても、近場にはソニーさんがCCDを作っていますし、こういうのがCCDなんだよっていう授業があるかもしれませんが、ソニーではこういう先端的なものをやっていて、スマホではこういうものが使われているなど、現在流通している商品、開発しているものを具体的に示して話をしてもらおうというのも一つかなと。オムロンさんも、センサーがありますし、あと、SMCさんの空圧回路など企業側の力を借りて勉強をするという枠があってもいいのかなと思う。

【委員のご意見】 地元企業を含めて、なにか直接技術者に話をしてもらう機会があればということですね。

【委員のご意見】 同じ先生から聞いても眠い、マンネリっていうよりもそういうスパイス的なところもひっくるめて、実際に産業界で何が使われているんだっていうようなところを、実際に、最先端のところで活躍している技術者、営業マン、営業技術の方でもいいかもしれないです。そういう話を聞くと、その会社のことも分かるし、産業界のことも分かるということで、そういうのも授業の一つとしてメーカーさんの協力を仰いだらどうなのかなと。

【委員のご意見】 確かにゲスト講義の制度はありますよね。それであれば、ゲスト講義を高専の方でリクエストしてもらえればよいかなと思う。

【委員のご意見】 それか、高専なので各専門の先生がいらっしゃると思うので、その専門の先生のお考えでそういうのをアレンジしていただければよろしいかなと思う。

【委員のご意見】 いろんなチャンネルを使ってということですね。

【委員のご意見】 高専は有能なエンジニアを育てるのが大きな目的だろうが、先ほどからの話でいくと、技術的な部分だけでなく、もう少し遊びの部分も授業に組み込むことで、個々の独創性も育つのではないかなと思う。授業時間が増えて現場は大変かもしれないが、「人間力」を育てるためには大事なことだろう。弊社は、高専から去年（15年）はシステム系職場に1人採用、来年（17年）も1人内定している。新聞はアナログな紙を媒体にしているが、今やシステムが止まったら発行も難しい時代だ。紙面の内容の大事さを理解しながらシステムの技術面でも力を発揮してほしい。そんな「丸ごと人材」、幅の広い人材が求められていると思う。

【委員のご意見】高専の方でもいわゆる一般教養みたいなことでやっておられるので、その中で俯瞰力をつけろとか、それからコミュニケーション能力をつけろというような中で生まれてくるものと思う。

【委員のご意見】地元合志市です。ご案内の通り、両町合併して10周年の市ですが、ちょうど市の中心部に国有地が点在しているので、評価基準の中の基準の13の地域連携、地域貢献を願う自治体です。街づくりを今一生懸命やっており、部門ごとに高専等と連携をさせていただいて、アイディアをお借りしたいということで、やはり今後とも、地域連携、地域貢献という意味での地域との交流を本校に期待しています。

6. 意見交換のまとめ

議長から、出された意見を提言事項にまとめるにあたり、一旦、議長の預かりという形で、高専と協議し整理した上で、改めて各委員に提示したい旨提案があり、全委員が了承した。

7. 閉会あいさつ

長谷川校長から、長時間にわたり協議いただいたことに対し謝辞が述べられた。

また、委員の皆様からのご意見については、最大限取り入れて、改善に努め、今後活かしていく旨の付言があった。

なお、来年度の本会議は、八代キャンパスで開催し、認証評価の結果等を報告予定との説明があった。

提 言 書

平成28年度熊本高等専門学校運営諮問会議は、会議での説明について、同会議において確認・評価した結果、以下のとおり提言します。

【自己点検・評価システムに関する提言事項】

提言 1	自己点検・評価にあたっては、自己点検・評価の評価項目14の中から高専で施策に基づいて選ばれたものについて、運営諮問会議委員それぞれの立場での意見を出していただき、高専側で使えるところを使って展開していく流れの中に、運営諮問会議は組み入れられているという方向性を見据えた自己点検・評価システムとしていただきたい。
------	---

自己点検・評価システムに対する意見等抜粋

- 1年に1回の2時間の会議で、諮問の在り方についての再認識はもう良いのではないかと思います。諮問の在り方を問われてもなかなか難しいような気がしますので、学校側がやりやすいようにある程度ポイントを絞って会議にかけていただければと思います。【亀田委員】
- この諮問会議は、委員がそれぞれの立場で意見を言わせていただくという立場ですので、学校側である程度テーマを決めていただき、その中で委員に対して意見が欲しいというタイムリーな事項を選定していただければと思います。【中村委員】
- 流れとしては、順番に流すよりも学校側で今課題になっていることをある程度絞っていただいて、14の中でこの諮問に付すべきテーマでないものははずしていただいてもいいのではないかと思います。【宇佐川議長】

【教育の質の向上と改善に関する提言事項】

提言 2	F D活動については、組織的に運用されていると理解しましたが、成果として学生の成績が上がっているかという視点も加えていただきたい。
提言 3	ゲスト講義など先生方の負担が減るようなことを、地域と連携してできることがないか検討していただきたい。
提言 4	F Dについては、教員側の議論ですが、その受益者である学生のことを考えたF Dとしていただきたい。

教育の質の向上と改善に対する意見等抜粋

- FD活動については、引き続き活動されていくと成果は上がっていくと思いますが、高専の学習内容は1時間の家庭学習でついていけるものでしょうか。学生のレベル自体が下がっているのであれば、先生方が求めるレベルを示して評価をさせないと学生たちが低いレベルで評価してもこの評価というものがあてにならなくなってくるのではないのでしょうか。FD活動をされながら先生方の授業力を上げるのもそうですが、学生たちの到達目標を高いレベルに持っていかないとFD自体が意味をなさなくなってくるのではないかと思います。【中曽委員】
- FDはわかりやすい授業を行うということで私は大賛成です。しかし、先生が一生懸命授業をされても本人のやる気が必要なので、意欲がわきやすい授業で本人がやる気を起こせばいいと思います。FD活動を行って、実際どのくらい学生の点数が上がったか具体的に示していただければと思います。【松村委員】
- 先生たちは授業をやりながら、授業の内容や組織的な改善までやらなくてはいけないということで大変だなと思います。技術とかは日進月歩で進んでいますが、せっかくこういった形で企業側として関わっていますので、企業側の情報を先生に提供し、それを使って授業をされると先生の負担は減るのではないかと思います。【平田委員】
- 授業外の学習時間については、eラーニングで問題が解けるようになるまで学生に要求すると、できる学生は1回で終了するし、できない学生には何度も繰り返し、自分自身ができたという満足感を得るチャンスを増やすことができる。また、教員側も複数の教員が同じ授業科目を担当して、単位認定の水準を一致させることができるので、両キャンパスの先生方が協力して教材を開発され、試験問題も同一のものを利用されるという工夫は、可能ではないかと思います。【宇佐川議長】
- 学校側と企業側は、立場の違いがあるということを認識していただき、そこでどうコラボレートしていけるかということ、案に盛り込んでいただくと企業側も意見を言えるという感じがします。【足立委員】
- 例えばゲスト講義などを入れると先生方も楽になるのではないかと思います。また、企業のニーズは何かということもわかっていただく必要があると思います。【田口委員】
- 先生ばかりではなくて、学生にも過剰に負担がかからないようにしなければならないと思います。【足立委員】

自己点検・評価システムについて

～ 今後の運営諮問会議の諮問のあり方 ～

自己点検評価委員会副委員長

共通教育科 伊藤利明

はじめに

運営諮問会議は、本校が第三者評価機関として位置づけるもので、本校の策定した基準による教育研究等の総合的な点検・評価を検証していただくことが重要な役割の1つである。この点の確認をしていただくことが今回の目的の1つである。

次に、これまでの諮問テーマは、その時々を中心的な取り組みを取り上げてきたが、昨年度のように上記検証のため広範囲な取り組みを一度に検証していただくという御負担をおかけした。そこで、自己点検評価委員会では、**検証事項の漏れなく、かつ委員の方に負担がかからないような**諮問のあり方について検討した。しかし、運営諮問会議の目的は、上記検証だけではないので、従来の方法が活発な議論がしやすいとも考えられる。今後の諮問のあり方について、ご意見を賜りたい。

今後の運営諮問会議の諮問のあり方

- 運営諮問会議の諮問のあり方について

「本校が定める基準による点検・評価」は、7年毎に実施されるので、14の基準のうち2～3の基準を、毎年開催される運営諮問会議の諮問テーマとしてとりあげ、検証をお願いする

- 期待される効果

1. 運営諮問会議委員の御負担が軽減される
2. 提言への対応は翌年には報告されるので、改善に活かされやすい
3. 総合的な活動状況全般にわたって、遺漏なく検証ができる

- 懸念される問題

1. 観点に沿った検証だけに終始し、自由に活発な議論になりにくい。
2. タイムリーな取り組みが、諮問の時期を逃してしまう。

I .運営諮問会議の特性と期待 される役割

自己点検評価と外部認証評価の義務

社会構造の急速かつ大きな変化や国民意識の多様化に対応するため、**自主的・自立的な学校運営**が認められたが、教育研究等について**自己点検評価と公表**、並びに**機関別認証評価**が義務づけられた。



自主的・自立的な
学校運営

改善指示



自己点検・評価



「自己点検評価書」

自己点検評価委員会

自己点検・評価と公表の義務
(学校教育法第123条)

評価



機関別認証評価機関

(大学改革支援・学位授与機構)

文部科学大臣の認証を受けた者
の評価を受ける義務(同左)



国立熊本高専
National Institute of Technology, Kumamoto College

運営諮問会議と機関別認証評価の観点との関わり

観点11-2-①

自己点検・評価が学校として策定した基準に基づいて高等専門学校活動の総合的な状況に対して行われ、かつ、その結果が公表されているか

観点11-2-②

自己点検・評価の結果について、外部有識者等による検証が実施されているか



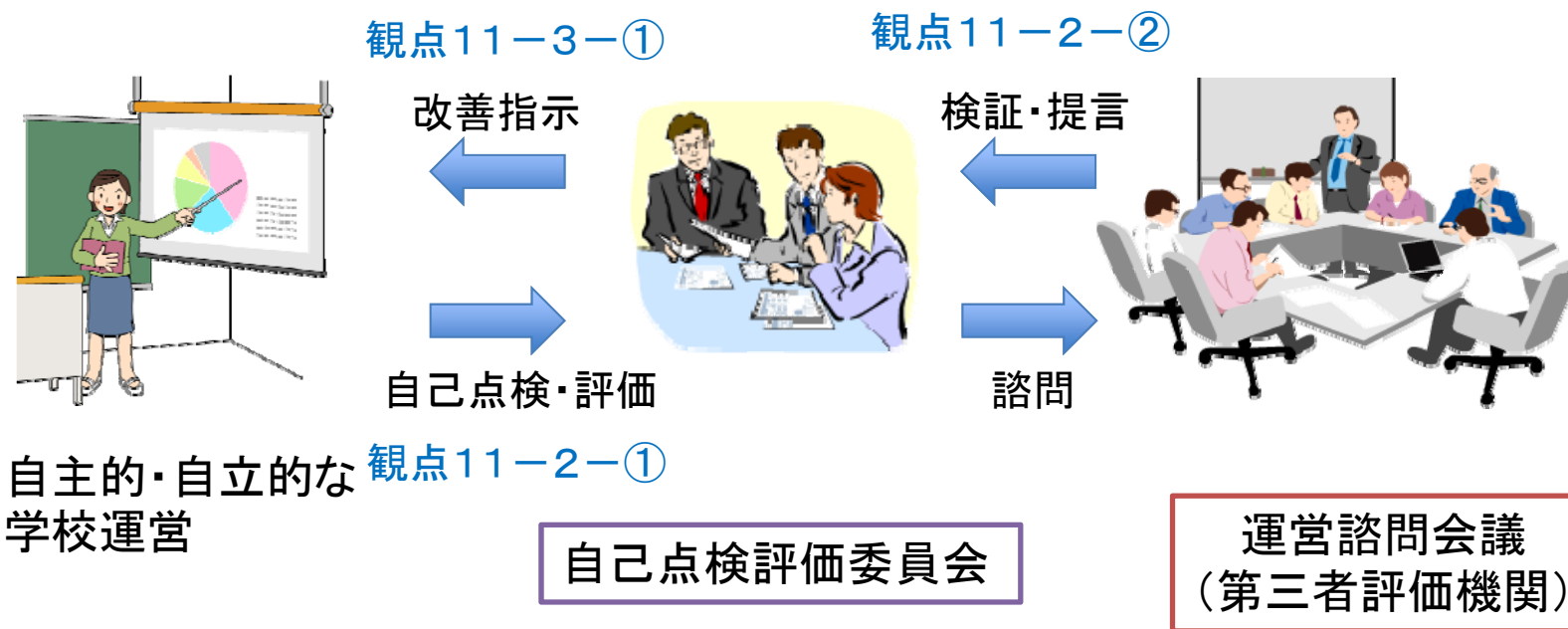
運営諮問会議の役割

観点11-3-①

外部有識者等の意見や第三者評価の結果が適切な形で管理運営に反映されているか

運営諮問会議に期待される役割

運営諮問会議は、本校の第三者評価機関として、本校の総合的な活動状況についての検証を行い、優れた取り組みや課題、改善の方向性の提言をする役割を担う



Ⅱ．諮問のあり方について

従来の諮問のテーマの選定方法と問題点

◆ 従来の諮問のテーマの選定方法

従来の諮問のテーマ(別紙参照)は、本校がその時々に取り組んでいる中心的事項をとりあげ、その都度御提言をいただき、方針の確認や改善につなげてきた。

◆ テーマ選定の問題点

- 従来のやり方では、検証の俎上にあがらない事項がでてくる
- 運営諮問会議で本校の総合的な自己点検評価について検証していただく上で、一度にするには検証事項が多く、委員の負担が大きい
- 一度に多くの提言をいただいても、学校として対応しづらい

自己点検・評価活動(内部評価)

「熊本高等専門学校における自己点検・評価方針」(平成27年10月9日制定)に基づき、定期的に各種の自己点検・評価を実施している。

区分	評価名	対象	実施	公開
内部評価	本校が定める評価基準による点検・評価	組織	7年毎	HP
	中期目標・計画及び年度計画	組織	5年毎 ・毎年	HP
	教員個人の教育研究活動等の点検・評価	教員	毎年	個人
	研究活動の分析	教員	毎年	教員
	授業評価アンケート	教員	毎年	学生
	学内アンケート	教職員・ 学生	適宜	適宜

「本校が定める評価基準による点検・評価」とは、学校の策定した基準に基づき、学校の教育研究活動全般の総合的点検・評価を行うものである。

自己点検・評価活動(外部評価)

区分	評価名	対象	時期	公開
外部評価	機関別認証評価基準による点検・評価	組織	7年毎	HP
	日本技術者教育認定機構基準による点検・評価	組織	6年毎	HP
	運営諮問会議	組織	毎年	HP
	外部アンケート(「企業アンケート」・「学外関係者アンケート」)	組織	適宜	HP

「運営諮問会議」は、本校が独自に組織した第三者評価機関で、「本校が定める評価基準による点検・評価」を検証する役割をもつ。

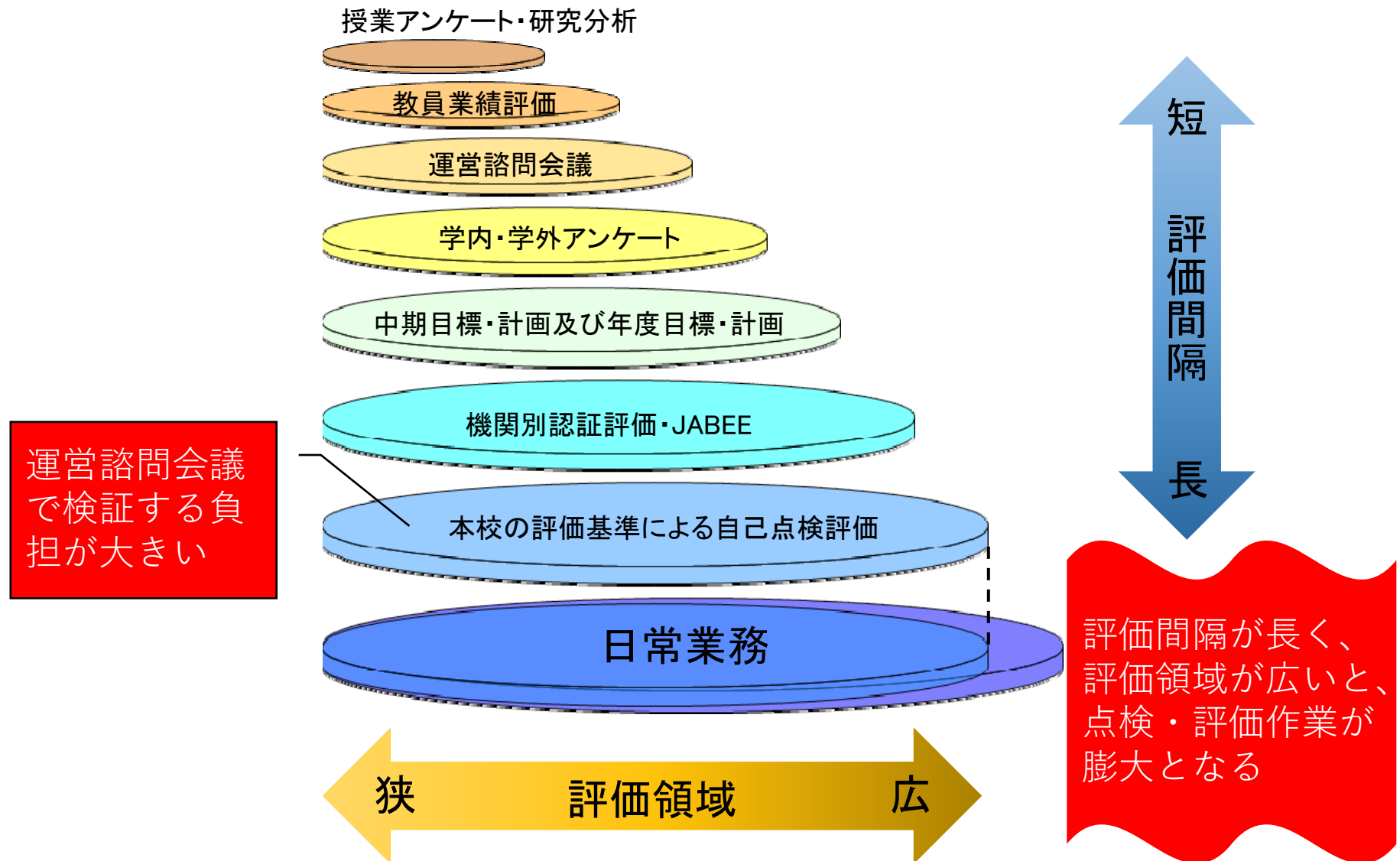
本校が定める評価基準による点検・評価

基準1 高等専門学校の目的	基準8 施設・設備
基準2 教育組織(実施体制)	基準9 教育の質の向上及び改善のためのシステム
基準3 教員及び教育支援者等	基準10 財務
基準4 学生の受入	基準11 管理運営
基準5 教育内容及び方法	基準12 研究活動の状況
基準6 教育の成果	基準13 正規課程の学生以外に対する教育サービス
基準7 学生支援等	基準14 国際関係の状況

学校活動の総合的評価で、本校の定めた評価基準14の観点83項目について、自己点検・評価を実施(7年毎)

→「自己点検・評価報告書」(本文96ページ・資料1413ページ)を作成

熊本高専の自己点検・評価活動の領域と間隔



Ⅲ. 今後の運営諮問会議の諮問 のあり方について

今後の運営諮問会議の諮問のあり方

- 運営諮問会議の諮問のあり方について

「本校が定める基準による点検・評価」は、7年毎に実施されるので、14の基準のうち2～3の基準を、毎年開催される運営諮問会議の諮問テーマとしてとりあげ、検証をお願いする

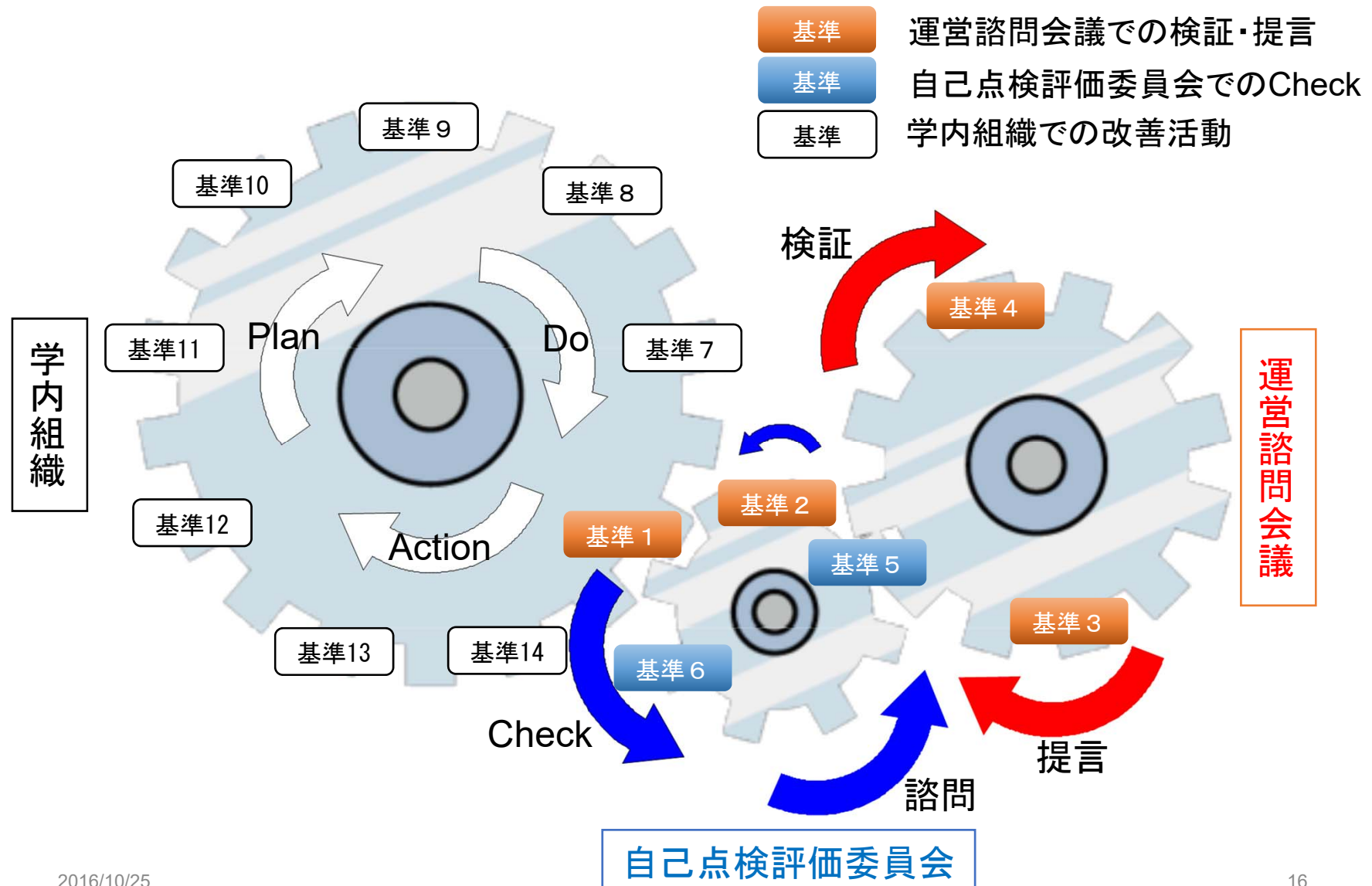
- 期待される効果

1. 運営諮問会議委員の御負担が軽減される
2. 提言への対応は翌年には報告されるので、改善に活かされやすい
3. 総合的な活動状況全般にわたって、遺漏なく検証ができる

- 懸念される問題

1. 観点に沿った検証だけに終わり、自由で活発な議論になりにくい。
2. タイムリーな取り組みが、諮問の時期を逃してしまう。

運営諮問会議への諮問の概念図



参考.

熊本高等専門学校の自己点検・
評価システム

7つの運営組織と自己点検評価における機能

Plan(企画・立案)

①企画運営組織 企画委員会・企画室 → 運営会議

Do(実施)

②学務運営組織 教務委員会・FD推進室など

③学生支援組織 学生委員会・寮務委員会・学生相談室など

④研究連携推進組織 総務委員会・科学教育支援室など

⑤管理マネジメント組織 環境施設マネジメント委員会・緊急対策室など

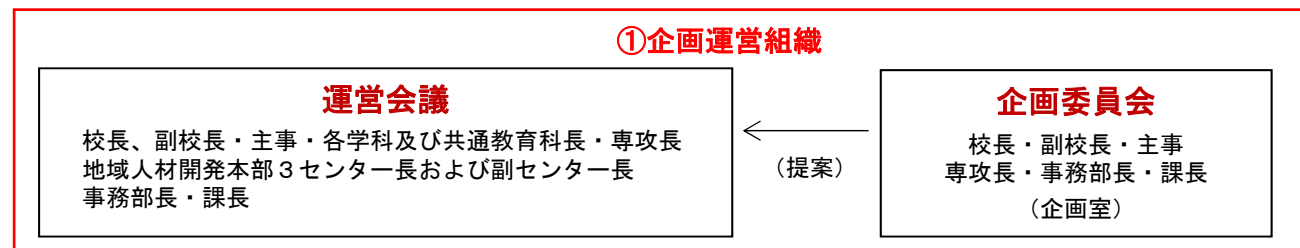
⑥コンプライアンス体制 コンプライアンス委員会・人権委員会など

Check(点検・評価)

⑦自己点検組織 自己点検評価委員会・運営諮問会議など

Plan(企画・立案)

熊本高专組織図(PDCA図)

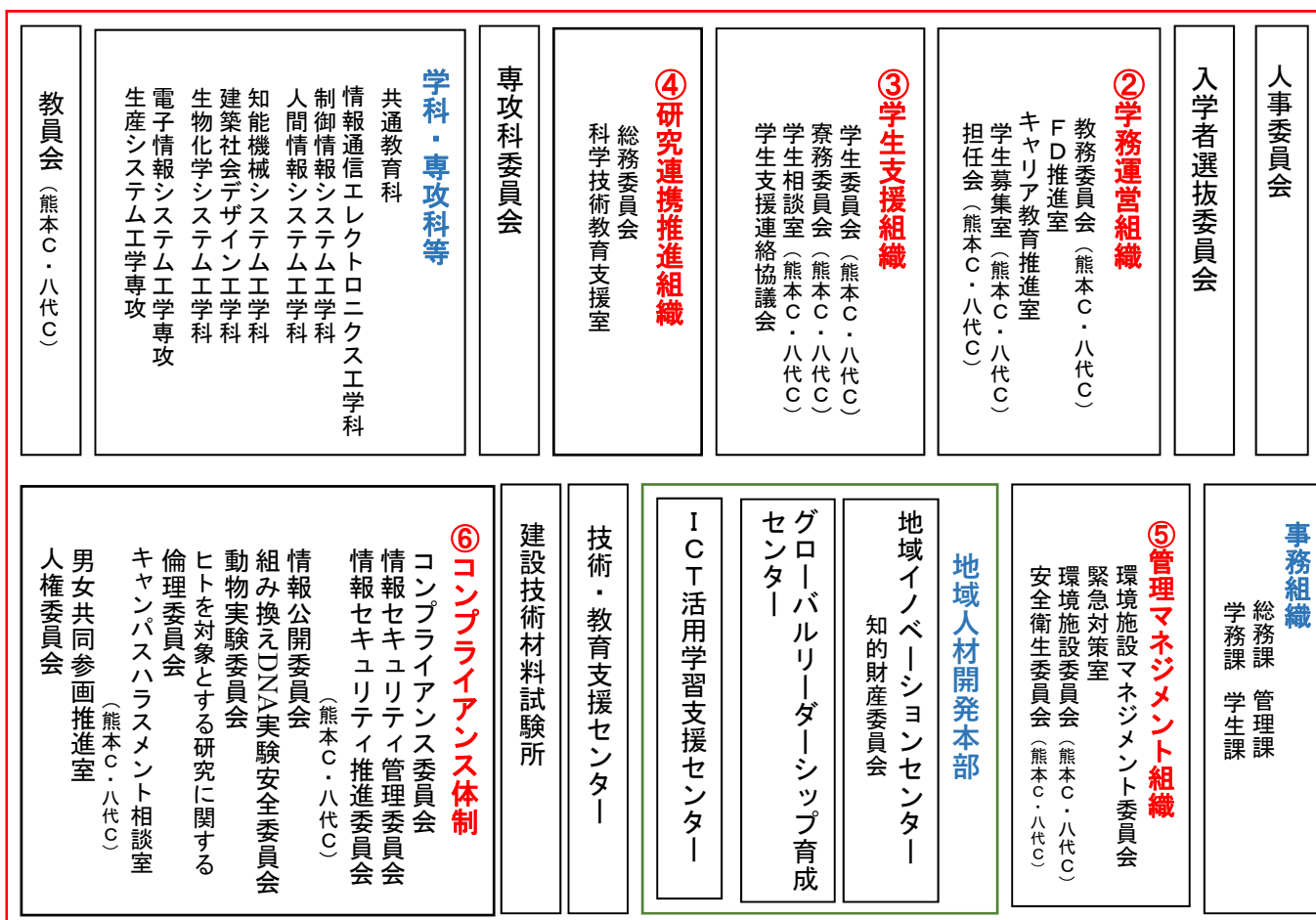


Action

(改善策作成指示)

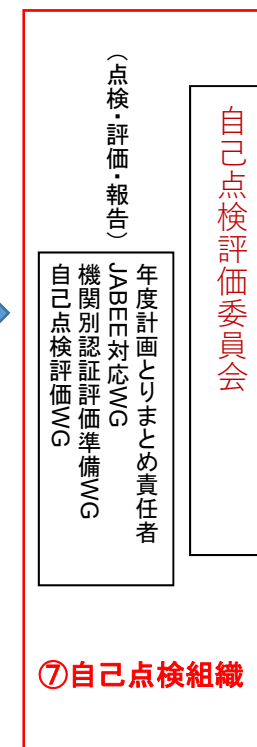
校長

Do(実施)



Check

(点検・評価)



**提言
検証**

(第三者評価機関)
運営諮問会議

学内

学外

開催年度	話題提供 熊本高専	
22年度	(八代キャンパス)	(熊本キャンパス)
		2010年8月24日 14:00～16:00 ・高度化再編の背景と新高専の概要(齊藤副校長) ・新設3センターの具体的活動(神田副校長) ・入口・出口の状況と今後の課題(宮川校長)
23年度	2011年10月24日 14:00～16:00 ・3センターの5ヶ年計画について (1)ICT活用学習支援センター(米沢センター長) (2)地域イノベーションセンター(小山センター長) (3)PBL・総合教育センター(松本センター長) ・専攻科教育の充実について(木場専攻科長)	
		2012年11月27日 14:00～16:10 ・「教育改善プロジェクトWG報告」について(松田熊本キャンパス学生教育改善プロジェクト座長・岩部八代キャンパス教育改善プロジェクト座長) ・「地域に根ざした研究活動の推進」について(大塚熊本キャンパス総務主事)
24年度		
25年度	2013年11月12日 14:00～16:00 ・熊本高専における学生生活指導の現状と人間力を養うためのアクションプラン(齊藤八代キャンパス副校長)	
26年度		2014年11月25日 14:00～16:00 ・熊本高専における英語教育と国際交流への取り組み(下塩熊本キャンパス副校長)
27年度	2015年11月18日 14:00～16:00 ・自己点検評価結果に関する説明 (1)自己点検の方法等全体概要の説明(開八代キャンパス副校長) (2)教育活動状況の自己点検評価結果の概要説明(下田八代キャンパス教務主事) (3)学生支援状況の自己点検評価結果の概要説明(古嶋八代キャンパス学生主事) (4)研究活動状況の自己点検評価結果の概要説明(小田八代キャンパス総務主事)	



教育の質の向上及び改善のためのシステム ～熊本高専のFD活動について～

FD推進室副室長
永田正伸

1



FD (Faculty Development) とは

「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」

その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。

注) 中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申(平成17年1月)より

※大学のFD活動については、平成11年度より努力義務が規定され、平成19年度より大学院、平成20年度より学士課程で義務化されています。

2



ご意見をいただきたい点

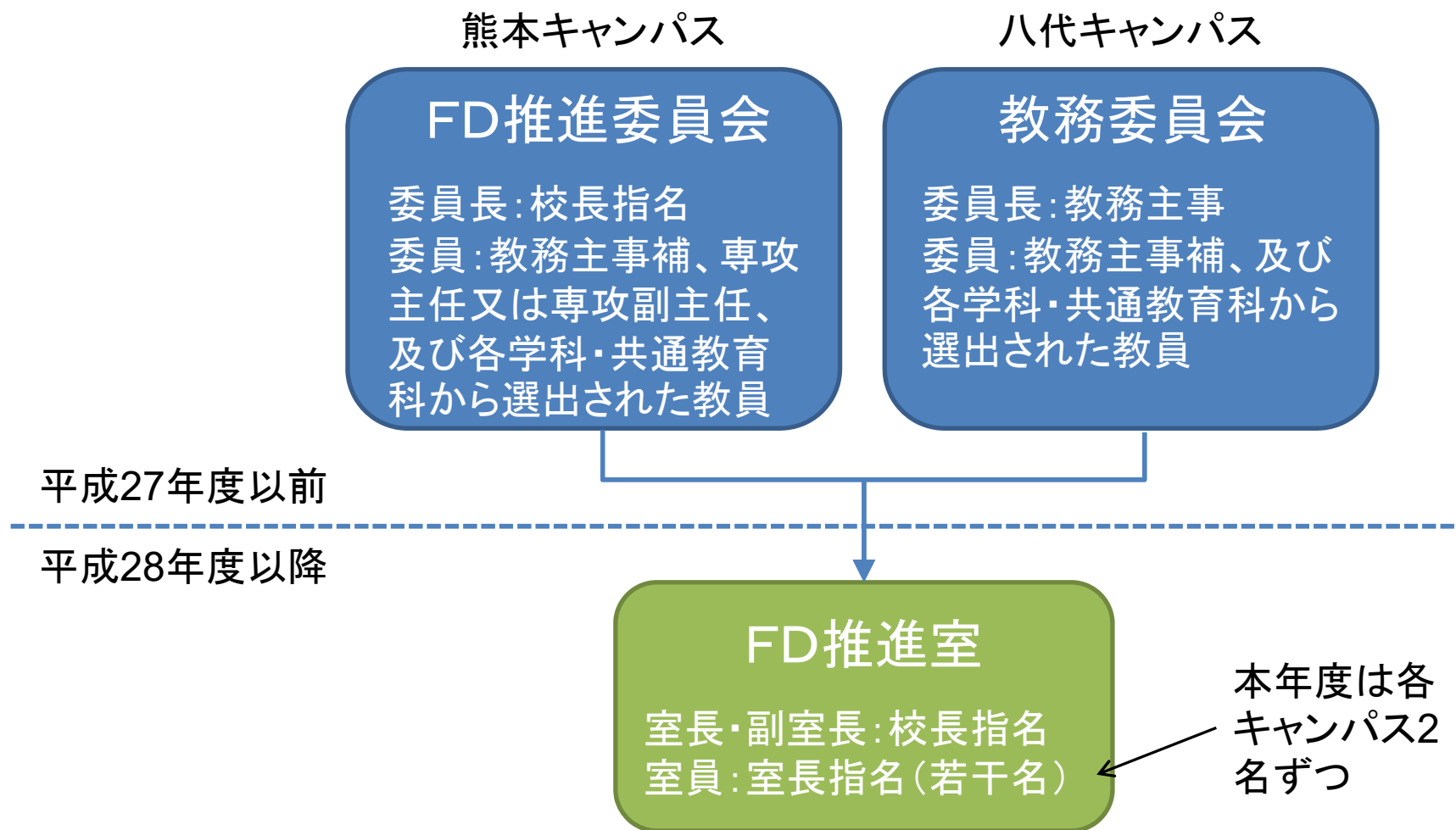
FD活動：授業内容・方法を改善し向上させる取り組み（教員相互の授業参観、授業方法の研修会、新任教員のための研修会など）について

観点①：組織的に適切に実施されているか

観点②：効果を上げているか

観点③：今後、改善すべき点、新たに取り組むべき活動等があるか

本校のFD活動の実施体制





目次

I. これまでの主なFD活動

1. FDに関する研究会・研修会の開催
2. 学生による授業評価の実施
3. 公開授業の実施

II. FD推進室の新たな取組

1. FD推進室の活動方針の明確化
2. 両キャンパスでの統一的なFD活動の推進
3. 教員向け研修会の計画的な実施
4. FDに関する情報共有・情報発信のためのWebページの作成
5. 外部研修会等への参加支援



I. これまでの主なFD活動

1. FDに関する研究会・研修会の開催
2. 学生による授業評価の実施
3. 公開授業の実施

FD活動:

観点①

(本校のFD活動が、)組織的に適切に実施されているか

上記の各活動の目的:

1. 研究会・研修会：教育の質の向上
2. 授業評価：授業の改善
3. 公開授業：教育の質の向上、授業の改善

1. FDに関する研究会・研修会の開催(教育の質の向上)

年度	熊本キャンパス	八代キャンパス
H25	9月 2日(月) 熊本高専教員研修会 ¹⁾	6月 7日(金)FD研修会「学習・教育到達目標設定法とその達成度評価方法」
H26		9月 1日(月) 熊本高専教員研修会 ¹⁾
H27	9月 1日(火) 熊本高専教員研修会 ¹⁾ 9月18日(金)教材コンテンツ作成講座 11月26日(木)アクティブラーニング講習会 2月 9日(火)アクティブラーニング講習会 ²⁾ 2月26日(金)アクティブラーニング講習会 ²⁾	6月 3日(水)FD研修会「効果的な授業を実現するために～CompTIA CTT+に沿った教授法～」 12月21日(月)Webシラバス説明会

1) 両キャンパス合同、隔年でキャンパス持ち回り

2) TV会議システムで八代キャンパスにも配信

※上記のほか、各センター主催でFD関連の研修会等が開催されている

2. 学生による授業評価の実施 (授業の改善)

授業評価の実施方法

項目	熊本キャンパス	八代キャンパス
実施方法	Excelファイルに回答を記入し、eラーニングシステム※)より提出	eラーニングシステムのアンケート機能より回答
実施時期	前期中間試験後	前期中間試験後
実施時間	授業中にクラス単位で実施	放課後にクラス単位で実施
実施科目	全科目	原則として各教員1科目
回答方法	無記名	無記名
フィードバックの方法	①アンケート結果に対する教員の分析、改善案の作成 ②結果(分析、改善案を含む)の学生への提示 ③改善後の自己評価(H27～)とその提示	①アンケート結果に対する教員の分析、授業改善への課題、学生へのメッセージ作成 ②結果(分析、課題、メッセージを含む)の学生への提示

Kumamoto Natla ※)eラーニングシステム: インターネットのWebサイトを用いた教材・問題提供、レポート提出等のシステム

2016/10/25

運営諮問会議



革新する技術、創造する未来 夢へ翔る熊本高専
国立熊本高専

2. 学生による授業評価の実施 (授業の改善)

授業評価のアンケート項目

熊本キャンパス	八代キャンパス
【授業内容の水準と量】 項目1: この授業の学習内容のレベルは適切でしたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 項目2: この授業の学習内容の範囲・進度は適切でしたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 項目3: この授業はシラバス(教育目標)に沿って行われましたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 【授業方法(理解を助け、勉学意欲を増進する工夫など)】 項目4: 黒板(スライドなども含む)の使い方は分かりやすいものでしたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 項目5: 教員の話し方は、分かりやすいものでしたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 項目6: 授業は質問がしやすい雰囲気、質問にも答えてくれましたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 項目7: 教員は私語などを防止し、授業環境の維持・改善に努めていましたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 項目8: 宿題やレポートの分量は適当でしたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 【学生自身について】 項目9: 授業中は熱心に取り組みましたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 項目10: 授業以外にこの科目の自主学習をしましたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5 項目11: この授業の内容をよく理解しましたか。 1 いいえ ----- 普通 ----- はい 5	1. 教員からシラバスを用いて説明がなされ、学習目標や成績評価方法を理解しましたか？ 5 十分理解した ----- 全く理解していない 1 2. 授業中の説明は分かりやすいですか？ 5 とても分かりやすい ----- 全く分かりにくい 1 3. 授業に工夫が感じられますか？ 5 十分に工夫が感じられる ----- 全く工夫が感じられない 1 4. 授業はシラバスの内容に沿って実施されていますか？ 5 十分に実施されている ----- 全く実施されていない 1 5. 授業に対する先生の熱意は感じられますか？ 5 大変感じられる ----- 全く感じられない 1 6. この科目の授業に積極的に取り組むことができましたか？ 5 大変よく取り組むことができた ----- 全くできなかった 1 7. この科目を学んで、学ぶ意欲は向上しましたか？ 5 大変向上した ----- 全く向上しなかった 1

2016/10/25

運営諮問会議

2. 学生による授業評価の実施 (授業の改善)

***** 授業評価アンケート分析結果 *****

平成27年度前期

科目コード	科目名	担当教員名	回答者数
			39

項目別 平均値 下段は(1年一般科目平均) (1年専門科目平均)

項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11
4.0	3.9	4.2	3.7	3.3	3.7	4.2	4.4	4.1	3.6	3.8
(4.3) (4.3)	(4.3) (4.3)	(4.4) (4.4)	(4.2) (4.2)	(4.1) (4.2)	(4.2) (4.2)	(4.2) (4.2)	(4.2) (4.3)	(4.2) (4.3)	(3.6) (3.5)	(3.9) (4)

【授業内容の水準と量】
項目1:この授業の学習内容のレベルは適切だったか。
項目2:この授業の学習内容の範囲・進度は適切だったか。
項目3:この授業はシラバス(教育目標)に沿って行われたか。

【教授方法】
(理解を助け、勉学意欲を増進する工夫など)
項目4:黒板(スライドなども含む)の使い方は分かりやすいものだったか。
項目5:教員の話し方は、分かりやすいものだったか。
項目6:授業は質問がしやすい雰囲気、質問にも答えてくれたか。
項目7:教員は私語などを防止し、授業環境の維持・改善に努めていたか。

【学生自身について】
項目9:授業中は熱心に取り組めたか。
項目10:授業以外にこの科目の自主学習をしたか。
項目11:この授業の内容をよく理解したか。

自由記述欄データ
「聞きとり辛い」、「回路図が見にくい」、「わかりやすかったです。」、「もっとはっきりと話してほしい」、「ちょっとわかりにくい」。

課題の分析
項目4, 5, 6について4点を下回っており「分かりにくい」傾向となっており特に話し方についての分かり難さが指摘されている。
項目10, 11について4点を下回っており、自主的な学習の不足と内容の理解が少ない傾向となっている。

今後の改善策
上記の分析に従って、各項目について下記のように改善する。
項目4:板書の分かりやすさに心掛ける。
項目5:分かりやすく(ゆっくり)話すことを心掛ける。
項目6:各テーマ毎に質問時間を取るよう心掛ける。
項目10:自学自習のための課題を設定する。
項目11:上記4～10の対応により理解度を高める。

熊本キャンパス

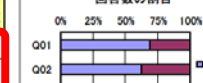
Kumamoto National College of Technology

2016/10/25

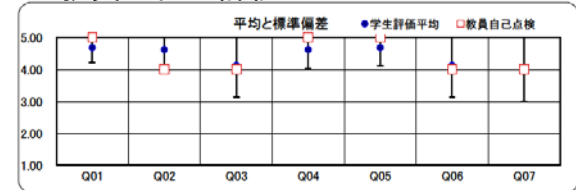
授業評価の分析と学生への提示
運営諮問会議

平成26年度 授業アンケート 授業改善レポート

学年	学 科	科 目 名	担当教員	開講	必・選	単位数	形態
5年				前期	選択	1	講義

番号	質問項目	データ内訳							学生 評価 平均	教員 自己 点検	回答数の割合
		5	4	3	2	1	無効	合計			
Q01	シラバスの説明	11	5	0	0	0	0	16	4.7	5	
Q02	説明方法	10	6	0	0	0	0	16	4.6	4	
Q03	授業の工夫	6	8	1	0	1	0	16	4.1	4	
Q04	実施状況	11	4	1	0	0	0	16	4.6	5	
Q05	先生の熱意	12	3	1	0	0	0	16	4.7	5	
Q06	授業への取り組み	6	8	1	0	1	0	16	4.1	4	
Q07	学ぶ意欲	5	8	2	0	1	0	16	4.0	4	

教員の自己評価



担当教員による考察

1. アンケート結果の分析

2009年に実施した同科目のアンケート結果に比べて、いずれの項目も高い評価となった。説明方法については概ね分かりやすいという意見が多い。

2. 課題設定(自由記述の意見もふまえて)

授業方法として、基本は板書により講義をしているが、試験が近づくと進度を早めるために、プリントを配布し、パワーポイントで説明している。その点について、学生からノートが取りづらいという意見があった。次年度は、プリント配布とパワーポイントを基本とし、最初から授業進度を早めることで、演習や施設見学などの時間が取れるよう、授業方法を改善したい。

3. 学生へのメッセージ

授業中は、居眠り等も少なく、集中している様子が見られる。できれば、積極的な質問をもっともらいたい。

熊本高等専門学校八代キャンパス 教務委員会

10



革新する技術、創造する未来 一歩一歩の熊本高専

国立熊本高専

3. 公開授業の実施 (教育の質の向上、授業の改善)

■保護者対象授業参観

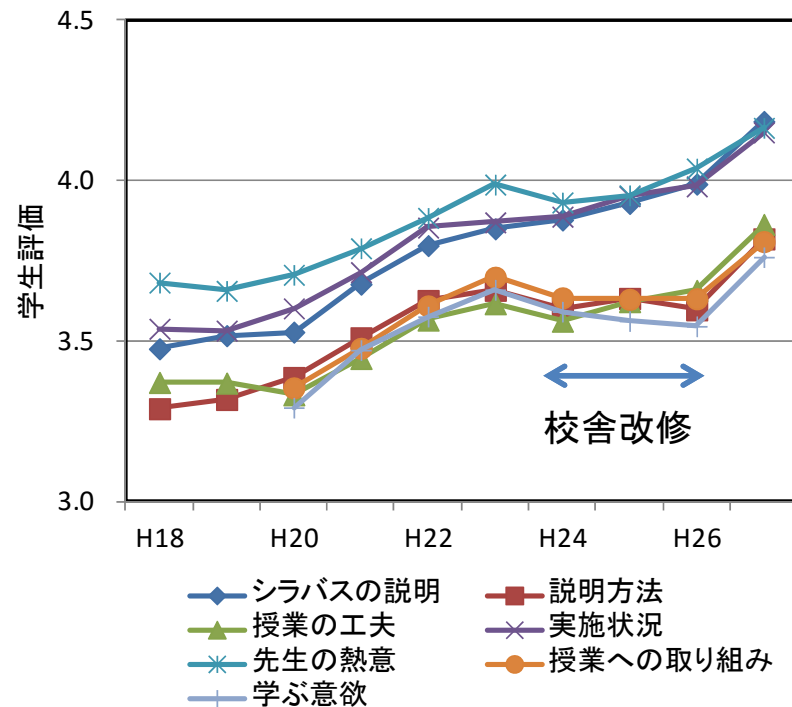
項目	熊本キャンパス	八代キャンパス
実施時期	4月の保護者懇談会開催時に実施	4月の保護者懇談会開催時に実施
実施方法	・保護者は自由に授業参観し、アンケートに回答 ・アンケート結果を授業担当教員に配布	・保護者は自由に授業参観し、アンケートに回答 ・教員専用Webサイトで全教員にアンケート結果を開示

■教員対象公開研究授業

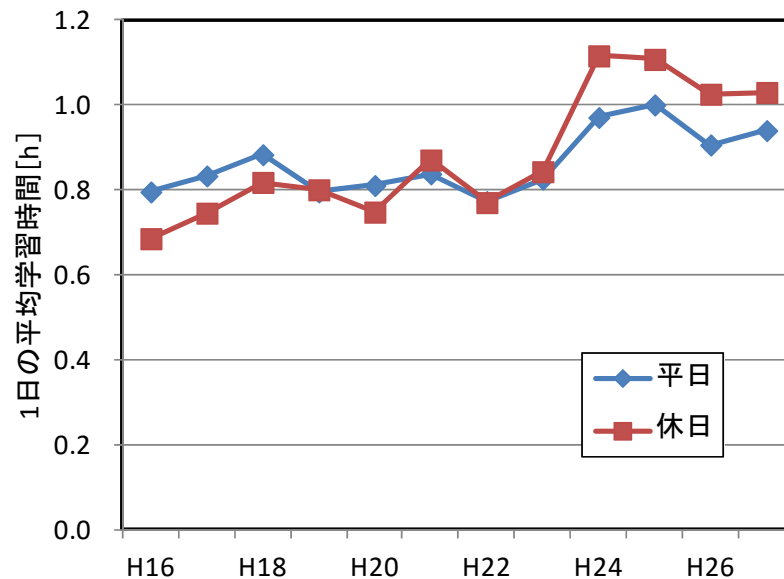
項目	熊本キャンパス	八代キャンパス
実施時期	5月	12月
実施方法	・教育改善グループ毎に対象授業を決め、授業見学 ・グループ毎に公開授業検討会を開き報告書を作成、改善策を実施 ・年度末に改善結果について点検し教務主事に報告	・関連科目、または学生の授業評価が高い授業について授業見学 ・授業の工夫、参考になった点等まとめた授業モニタリングカードを教務委員会に提出し、教員専用Webサイトで全教員に開示

3. 公開授業の実施 (教育の質の向上、授業の改善)

・FD活動の効果(八代キャンパス)



授業アンケート結果の変化
(八代キャンパスの評価結果より作成)



1日の平均学習時間の変化
(八代キャンパス学生生活実態調査の結果より作成)



Ⅱ．FD推進室としての新たな取組

1. FD推進室の活動方針の明確化
2. 両キャンパスでの統一的なFD活動の推進
3. 教員向け研修会の計画的な実施
4. FDに関する情報共有・情報発信のためのWebページの作成
5. 外部研修会等への参加支援



1. FD推進室の活動方針の 明確化

FD推進室は、『適切な準備や工夫により、学生が効率よくシラバスの到達目標を達成し、学びの意欲が高まる授業』を目標に、研修会・勉強会の開催、外部研修会等参加費の支援、優れた教育の実践例の情報提供等により、授業改善・授業力向上を目指す教員を支援します。

※メール、第1回目のFD研修会の開会挨拶、FD推進室のWebページにて周知



2. 両キャンパスでの統一的な FD活動の推進

○ 学生による授業評価方法の統一

授業改善・授業力向上を目的として、アンケート項目を統一し、来年度導入予定の全国高専共通の学習管理システム(または本校のeラーニングシステム)を用いたアンケート方式に移行

○ 公開研究授業の統一

授業改善・授業力向上を目的として公開研究授業の実施方法を統一

※平成29年度からの実施に向けて、今年度検討



3. 教員向け研修会の 計画的な実施

○ 年度を通したテーマを設定

今年度はID (Instructional Design) をメインテーマとして、熊本大学大学院 社会文化科学研究科 教授システム学専攻 教授 鈴木克明先生を講師にお招きし、授業設計の基礎を学ぶ

○ 研修会形式の区分

全教員を対象とした「講演会型」と、講演会の内容に興味を持った教員を対象とした「勉強会型(Workshop)」に分けて実施

○ 年間スケジュールの提示

研修会の年間スケジュールを策定し、年度当初に教員に提示

16



3. 教員向け研修会の 計画的な実施

○ 平成28年度の年間スケジュール

平成28年6月21日 「ID導入講演会」:

平成28年8月4日 「ID勉強会:Workshop研修」:18名参加

平成28年8月30日 「熊本高専教員研修会」(八代Cにて、全教員対象)

- ・講演第一部:高専の研究・産学連携活動について
- ・講演第二部:クラウド型のワークスタイル ～Office365の活用～
- ・FD分科会1:アクティブラーニング授業の導入に向けて
- ・FD分科会2:学生授業評価アンケートの見直しと授業改善への位置付け
- ・FD分科会3:学生の主体的な学びを育むために

平成28年9月21日 「ID勉強会:Follow Up研修」:9名参加

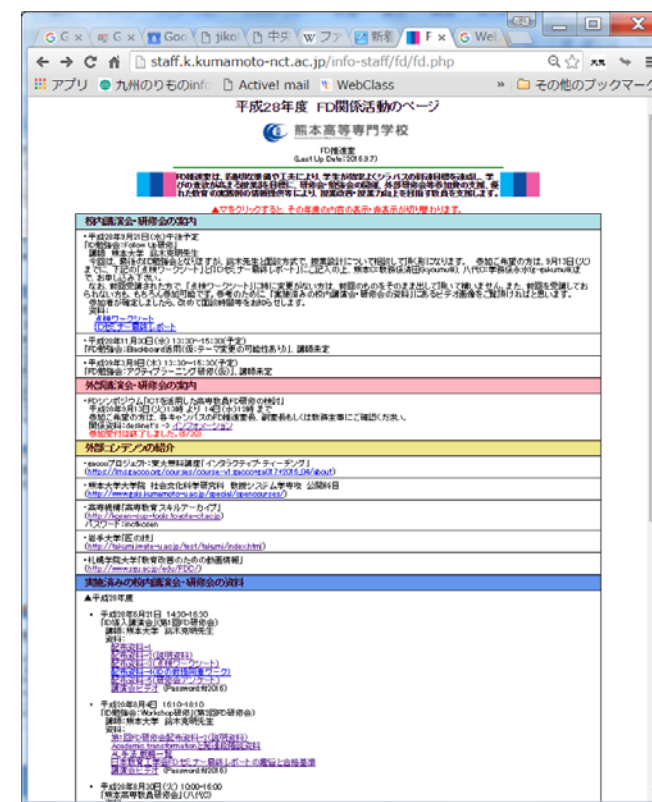
平成28年11月30日 「FD勉強会:Office365活用(仮)」

平成29年3月9日 「FD勉強会:アクティブラーニング研修(仮)」

4. FDに関する情報共有・情報発信のためのWebページの作成

FD推進室のWebページを作り、教職員に下記情報を発信し、情報を共有

- ①校内講演会・研修会の案内
校内で開催予定の研修会等の案内、配布資料
- ②外部講演会・研修会の案内
学区外で開催予定の研修会等の案内
- ③外部コンテンツの紹介
教育改善・授業力向上に関係する各種コンテンツの紹介
- ④実施済みの校内講演会・研修会の資料
校内で実施した研修会等の配布資料、ビデオ映像
- ⑤外部講演会・研修会受講者の報告書、資料等
外部研修会等の受講者の報告書・資料等
- ⑥その他
教材作成ツール他



FD推進室のWebページ



5. 外部研修会等への参加支援

○ 外部研修会等への参加旅費の補助

研究費等削減される中、授業改善・授業力向上に取り組む教員を支援するため、外部の研修会等に参加する教員に対して、旅費等を補助する。

FD推進室として予算化：総額 280,000円

（各キャンパス東京2名分程度）

○ 外部研修会等の情報共有

外部の研修会等へ参加した教員は、報告書の作成、Webページへの掲載、学内研修会での報告等により 情報共有を行う



ご意見をいただきたい点

FD活動：授業内容・方法を改善し向上させる取り組み（教員相互の授業参観、授業方法の研修会、新任教員のための研修会など）について

観点①：組織的に適切に実施されているか

観点②：効果を上げているか

観点③：今後、改善すべき点、新たに取り組むべき活動等があるか

よろしくお願い致します。

20